世界の著名な特許にみる ―――――――― 第１回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

全米発明家殿堂編

科学＆知財クリエイター・弁理士（雅号）
大樹　七海

１．はじめに

今号から連載開始される世紀の発明事業列伝。同連載は世界を変えた発明を生み出した発明家列伝を軸としますが、その発明の事業化部分に焦点を当てたものとなります。

発明家自身の所業はもちろん素晴らしいのですが、その発明が著名と言えるレベルにまで至ったのは、その発明による事業が成功したからに他なりません。その「思いつき」が「発明」に昇華し、適切に「特許」として権利化されることで、特許システムを通じて課題を実現するためのアイデアが公衆に供されます。そして、そのアイデアに勝機を見出した方々により投資が決まり、最適だと思われるビジネス・アライアンスが組まれて事業化され、多くの試みにより製品・サービスとして遂に具現化され、そうしたものが更に多くの方々の協力を要する販売・物流方式の考案と構築を経て、社会の要求仕様に耐えうる生産・回収のサイクルまで完成することで、世界中に十分にかつ安全に普及させることが出来るようになります。ここまできて、ようやくはじめて、「**その発明の真価が世の中で発揮されることとなった**」、とも捉えることができます。たとえ素晴らしい思いつきであっても、この険しく長く苦しい一連の歩みの途中で挫折し、その真価を発揮することなく消えていった無数の残骸はこの世に山ほどあります。

「思いつき」を実現する。そして事業化する。この過程にこそ、単なる思いつきを、「偉大な発明」とならしめる「才覚」が詰まっています。

当時はまだ荒唐無稽にも思えたかもしれないその発明の本質をいち早く捉え、その重要性を理解し、その発明の実現への道を信じて、人生を賭けて事業化に邁進された方々の目利きと気概に満ちた人生も、発明家と同様かつそれ以上に、素晴らしい所業です。そのため、本連載では、発明の事業化、つまりは社会への普及という面に焦点を当てて展開していきます。そうした著者の思いも込めて、「発明家列伝」よりも「発明事業列伝」という言葉が相応しいと感じ、タイトルに「世紀の発明事業列伝」という言葉を当てました。